

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02734

研究課題名（和文）認識と行動の変容を促す深い学びを創造する『ESDラボ』の実証的研究

研究課題名（英文）Empirical research of the "ESD Lab" to create deep learning that promotes changes in cognition and behavior

研究代表者

藤原 一弘（FUJIWARA, KAZUHIRO）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：40824082

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ESDを軸にした探究的な学びを支えるカリキュラム開発や実践の支援を行い、教職員の資質能力向上、ESD推進を目的に「ESDラボ」を設置し、その有用性を明らかにするため研究を行った。当初予定していた海外へのESD調査は新型コロナウイルスの影響の為、中止を余儀なくされたが、一方で自治体と連携して地域版SDGsハンドブック及び指導の手引きを作成し、それらを活用してESD推進を行ったり、ESDの研修会を定期的実施することで地域のESD活性化のみならず新たな繋がりを構築し、学びの機会を拡充させるなど、当初の目的であったプラットフォーム的機能を活かすことで地域の学びの質が高まることを実証することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ESDはその重要性を指摘されながら、長年にわたり一部の地域、学校、教員の取組で閉じてしまっており、広く浸透していくことができずにいる。本研究では「ESDラボ」というプラットフォーム的機能をもつ組織を構築することで、地域の教育資源を繋ぎ合わせ、学びの質向上に寄与することを実証することができた。教員がESDについて知る場、学ぶ場、交流する場、伝える場を持つことが、教員自身の学ぶ意欲向上に繋がるとともに、積極的にESDを進めていこうとする意識が芽生えることも少しずつではあるが、見出せるようになってきた。学校教育の閉じた学びが開かれた学びに変わること、子どもたちにもよい影響を与えることも証明された。

研究成果の概要（英文）：We provided curriculum development and practical support to support exploratory learning centered on ESD. In addition, the "ESD Lab" was established for the purpose of improving the qualifications and abilities of faculty and staff and promoting ESD. The originally planned ESD survey overseas was forced to be canceled due to the impact of the new coronavirus. However, in collaboration with local governments, we were able to create a local version of the SDGs handbook and instruction guide. In addition, it was used to promote ESD. By regularly holding ESD workshops, we were able to build new connections as well as revitalize ESD in the region. Furthermore, we were able to demonstrate that the quality of learning in the region can be improved by utilizing the platform function, which was the original purpose.

研究分野：ESD、学校教育、総合的な学習の時間

キーワード：ESD 深い学び 教職員の資質能力向上 総合的な学習の時間の充実 地域と学校の学びの連携

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）は、世界中で推進され、積極的な取組が行われている中、日本の学校教育ではESD/SDGsの受け皿・推進役をユネスコスクールが担うことが示され、それぞれの地域で取組をしている。一方で、ESDの理念がユネスコスクールや一部の学校だけの「特別な実践」に留まり始め、一向に広がりを見せていないという大きな課題にぶつかっている。特に日本ユネスコ国内委員会が当時、指摘していたように「学校教育におけるESDの普及が十分に進んでいない。教職員のESDに関する理解が十分に進んでいない。ESDを実施しようと思っても学校現場でどのような学習活動を行えばよいのかについて十分な情報がなく、現行の学習活動に対して付加的なものとしてとらえられることが多い。」という課題が重くのしかかっている状態が常態化していた。

2. 研究の目的

以上のような現状から、「地域の将来を担う教員を養成している学部において、学校と地域、NPOや企業を結び付けるプラットフォーム的機能を学内に設置し、研究を推進、発展していく必要があるのではないか。」という課題意識に立ち、①ESDのプラットフォーム的機能を果たし続ける長期的・継続的・未来発展的な組織の構築、②ESDを軸にした深い学びのカリキュラム開発・実践の蓄積と長期的・継続的な調査研究、の2点を軸に研究を実施することにした。本研究を通して、多くの学校・自治体で最重要課題となっている若年層教員の増加によるキャリア発達、資質能力の向上にも長期的・継続的に関わるとともに、ESD推進を妨げている課題を克服し、子どもたちに質の高い学び、自己変容と社会変容を共に構築できるような豊かな学びを提供することが可能になることを明らかにしていくことを目指した。

3. 研究の方法

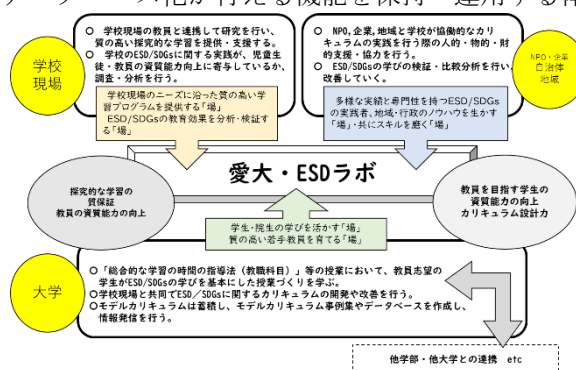
本研究では、上記の2つの目的を達成するために、下記のような方法で検証することとした。

(1)「愛大・ESDラボ」の設置と運用

既存の研究組織やESDに関するネットワークを参考にしながら、申請者が所属する講座内に「愛大・ESDラボ」を設置した。ここでは、学内でESDを推進する教員や近隣の学校教員、活動支援センター、NPOなどに会員となっただき、ESDラボを活用しながら積極的に域内外でESD推進を行ってもらえるような体制を構築した。また、愛媛県教育委員会や松山市教育委員会など地元自治体とも連携しながら研究や実践を進められるようにした。「愛大・ESDラボ」では、HPを立ち上げ、日常的に発信・交流・データベース化が行える機能を保持・運用する体制も創出した。

(<http://esdlab.ed.ehime-u.ac.jp/>)

また、ESDラボを軸として、学校教員や学生、地域のステークホルダーが学び合える場として研修会や講演会、勉強会を適宜開催し、ESDの周知と推進を図り、ステークホルダー間の連携・交流を促進する。



(2)ESD のカリキュラム開発と実証

学生の学びの質を高めたり、教員のカリキュラム開発力を向上させたりできるよう、ESDの視点で作成した単元を、教科学習や総合的な学習の時間で実施することで、子どもたちの深い学びにどの程度貢献できるのかを確かめるように計画した。具体的にはESDに関心のある教員を中心に実践を行ってもらい、その効果を分析したり、検証したりする。加えて、作成した単元はESDラボのHPにデータベース化して、活用するとともに、近隣地域及び関係各所に冊子化したものを配布し、積極的な活用と推進を行う。

また、海外のESD調査と連携の可能性を探るために以前より大学や申請者が関係の深い台湾やモザンビーク共和国でESDのカリキュラム開発に関わる調査を行い、その成果を還元できるようにする。

(3)ESD や総合的な学習の時間に関する実態調査

ESDの現状や総合的な学習の時間の実態について、質問紙調査やインタビュー調査を実施し、その結果から、解決策を見出しつつ、新たな学びのあり方について、提言していくようにする。また、ESDに関心のある教員・学生の継続的な追跡調査を行い、ESDが教員のキャリア形成や授業力向上にどの程度資するのかを明らかにしていく。

4. 研究成果

研究成果としては、第一に、多くの研修会を開催することにより、ESD に関心のあるステークホルダーが学び合える場を構築できたことである。研究期間内に計 18 回もの研修会を開催することができ、ESD ラボを設置した愛媛県だけでなく、全国から参加者を集めることができた。ESD 授業づくり研修会では、ESD を取り入れて実践を行っている教員を講師として、互いに学び合うことができる仕組みが構築された。

また、2020 年 1 月には、ESD 研修交流会（兼日本 ESD 学会第 1 回四国地方研究会）を開催し、全国から 180 名を超える参加者を集め、実践や理論について学び合うことができた。基調講演を聖心女子大学教授の永田佳之先生にいただき、研究者の発表や教員の実践取組報告、地域の NPO や企業の取組紹介、高校生の課題研究発表などを行う中で、ESD の重要性やさらに浸透させていく必要性を再認識することができた。



上記の会が引き金となり、その後は、愛媛県内の取組や研究報告から大きく飛躍し、四国の NPO や四国地方 ESD 活動支援センターと共同で、四国 ESD フォーラムとして開催するようになるまで成長した。よりダイナミックに、また様々な活動や実践が集まり、「四国の ESD」をどのように発展させていくか、といったシンポジウムや分科会を行うことで、高校生から教員、学生、地域住民まで多様なステークホルダーが一堂に会し、互いの実践を高め合い、交流を広げ合える場を創り出すことができた。

二点目は、自治体と連携して、学校教育の場で ESD 推進が行えるようになったことである。特に、申請者が所属する大学の地元である松山市との連携が進み、ESD 及び SDGs 推進について共同で研究を行えるようになった。松山市の SDGs 推進協議会に登録し、積極的に各学校で SDGs に関する講義や出前講座などを学生主体で取り組んでいく一方、松山市観光・国際交流課、松山市教育委員会と連携し、「松山市版・SDGs ハンドブック」を作成し、市内全学校に配付して活用することになった。申請者は、ハンドブック作成に加え、実際の学校現場での利用促進も行うことになり、より幅広く ESD 推進を実施することができた。

加えて、本ハンドブックの指導の手引きの編著者となり、ESD ラボが中心となって、教員がより ESD に関わりやすい手立てを提供することができた。本冊子は、各学校に配付されるとともに、松山市教育委員会が運営するポータルサイトにも掲載され、常時、教員が学べる環境整備まで構築することができた。

三点目は、本研究を進めていくに従って実践する ESD の質が向上していったことである。上述した仕組みの中で、教員が互いに学び合える空間を創出し、そこでの学びを活かしてカリキュラム開発や実践が繰り返されることで、参加した教員が常に持続可能性を意識しながら、指導に取り組むようになったことである。研究期間内には、新型コロナウイルス感染拡大により、活動が制限される中でも、GIGA スクール構想により、配布されたタブレットを活用した学びや ESD の評価研究にまで着手することができたことは、教員の『認識と行動の変容』を生み出してきていることの証左である。

本研究の大きな目的が、ESD は世界中で取組が行われているものの、国内では体系だった研究が十分に行われていない現状を打破していくことにあった。ESD は「日本のガラパゴス化」が起こっていると指摘され、「閉じた中での Good Practice」になってしまいがちな ESD の取組を、ユネスコスクールや環境教育に限定されないオープンな形で広めていき、教員養成と学校現場、ESD の推進に不可欠な地域や NPO・企業との連携を図る機能を設置するという目的をある程度達成しつつあると考えている。さらに、長期的視野に立って継続的に学びを支援し、そのノウハウを蓄積・発信していくためには、設置した大学内のプラットフォーム的機能をさらに充実させ、社会の中に点在している ESD の学びを、さらに太く結び付ける役割を果たすことが求められていると考える。

一方で、課題も残されたことを付記しておく。当初の研究計画では、上述した学びの仕組みを構築すること以外に、調査研究を行い、学びの質保障を行うことにあった。特に海外に向向いの ESD に関する調査は、新型コロナウイルス感染拡大により、渡航が禁止・制限されたため、中止・延期せざるを得なかった。オンラインでの調査も検討を試みたが、限界があり、今後研究を進展させていく中で、さらに多様な ESD の実態をつかめるような調査を敢行したいと考えている。加えて、ESD や総合的な学習の時間の調査も実施できなかったことである。総合的な学習の時間は、新型コロナウイルス感染の影響を大きく受ける学びで活動を縮小・中止している学校が相次ぎ、研究期間には学校への視察・実地調査を行うことも困難であったためである。これらの調査については、今後研究を進めていく上で、欠かせないものであるため、しっかりと準備を行って実施につなげていきたいと考えている。すでに、愛媛県内の総合的な学習の時間主任などへの調査については、関係機関から内諾を得ており、新型コロナウイルス感染が落ち着いたら実施する方向で進めている。本研究で得た成果を活かし、今後も地域の ESD 推進と子どもたちの学びの充実に向けて、研究を継続発展させていく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤原 一弘
2. 発表標題 ESD / SDGs の視点で構成する総合的な学習の時間における評価に関する一考察 - タブレットを使った評価の実践報告
3. 学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会 第31回全国大会 広島・三原大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤原 一弘
2. 発表標題 ESDに関する教育プログラムの開発
3. 学会等名 愛媛主権者教育研究会、愛媛大学附属高等学校 愛媛主権者教育研究会成果報告会合同研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 藤原一弘, 敷村弥生, 竹内よし子, 竹下浩子, 松本光司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国際協力・国際理解推進実行委員会（松山市産業経済部）	5. 総ページ数 20
3. 書名 みんなで始めよう！ 未来のためのSDGs	

1. 著者名 藤原一弘（編著）, 篠原慶史, 鼻崎吉則, 松岡沙緒里, 品川崇, 吉岡舞, 竹内よし子, 竹下浩子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国際協力・国際理解推進実行委員会（松山市産業経済部）	5. 総ページ数 40
3. 書名 松山市版・SDGsハンドブック「みんなで始めよう！未来のためのSDGs」【教師用】指導の手引き	

〔産業財産権〕

〔その他〕

愛大・ESDラボ
<http://esdlab.ed.ehime-u.ac.jp/>
愛大・ESDラボ
<https://esdlab.ed.ehime-u.ac.jp>
持続可能な社会実現のために、教育で人々の行動を変える 【みらいぶっく（学問・大学なび）】
<https://www.sekaiwokaeyo.com/theme/12019/>
愛大・ESDラボ
<http://esdlab.ed.ehime-u.ac.jp>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------